



水産学部図書室の現状

水産学部教授 元 田 茂

水産学部は札幌キャンパスの他学部と離れて函館にあるため、学部図書室の存在意義は他学部と同日に論ぜられない。抑々水産学部は旧函館水産専門学校に旧農学部水産学科4講座が加わって成立したものであるが、古い図書の重要部分は函館水産専門学校の前身である北海道帝国大学附属水産専門部時代に購入したものである。例えばチャレンジャー号航海学術報告をはじめ、いくつかの学術探検航海の膨大なモノグラフの蒐集は、当時の水産専門部の先生たちが多大の犠牲を払って揃えたものと聞いている。水産学部が成立して後昭和28年~30年に道庁から図書費500万円の援助を受け、その一部でその後の大冊の航海報告を揃えたので、未だ完全とは云えないが、他の水産関係の大学にみられない誇るべき蒐集をもつに至った。その外学部になってから鋭意専門図書、雑誌の購入に努めた甲斐あって、海洋、航海、海洋生物、利用加工化学関係の専門雑誌のバックナンバーが大いに整って来た。なお本学部図書室には故藤田経信先生、故大島正満先生その他いくつかの貴重な文庫が収められ、夫々特別の書棚に収容し、傍に寄贈者の写真と略歴を飾り、後世まで忘れられないようにしている。

旧水産専門学校の図書室は364 m² しかなかったが昭和32年函館市から289 m² の書庫が寄附されて一応息をついた。しかし6万冊に及ぶ専門図書、1,400種に及ぶ学術雑誌のバックナンバーを収容しているに拘らず、事務室、教官閲覧室の狭隘なるに加え、図書職員は定員僅か4名にすぎず、止むを得ず臨時職員1名を加えて整理と閲覧サービスに当って居る。蔵書数、利用数と図書定員の比は本学諸学部中最低の状態で、機能不全の結果は各講座が夫々独立にマイクロ図書館をもつ傾向を助長し、高価な外国学術雑誌を二重、三重に一学部で購入するという無駄を生じている。目下学部の研究棟、講義棟の改築が進んで居り、図書室の改築も最後に行なわれる予定である。新図書室が完成すれば、新着学術雑誌、バックナンバーなどの閲覧、貸出はもっとスムーズに行い易くなるであろうが、受入、整理、閲覧、貸出サービスなどを完全ならしめるのに不可欠の図書職員の定員増の見込みがない。施設と定員共に揃って真の大学図書館としての機能を発揮出来るのはいつの日であろうか。

◆ 会 議

第49回 図書館委員会

<と き 昭和45年9月26日(土)>

<ところ 附属図書館会議室>

1. 附属図書館図書選定委員会内規(案)が了承され、9月26日から施行、8月1日から適用されることとなった。
2. 閲覧個室利用者(第1種は10月1日から翌年3月31日まで、第2種は10月1日から12月28日まで)の選考が行なわれ、第1種は7名、第2種は38名が許可された。
3. 国立大学図書館協議会「大学図書館の未来像」特別委員会報告をめぐり種々討議された。つづいて館長から本学における図書館改革の問題については、大学改革案審議の一つとして取上げるよう適当な機会に評議会に提案したいと考えている旨の説明があり、了承された。
4. 教養分館備付図書(複本)3,572冊、4,213,000円を昭和45年度緊急経費として事務局に要求した旨の報告があった。

第50回 図書館委員会

<と き 昭和45年10月30日(土)>

<ところ 附属図書館会議室>

1. 本年度学部共通図書は次の資料を購入することとなった。
 - (1) Soviet Psychology and Psychiatry. Vol. 1-5.
 - (2) The Annual Report of the National Labor Relations Board. 1set-30th. in 15 Vols. (1936-1965).
 - (3) Encyclopedia of chemical Technology. 2nd. ed. Vol. 1-21.
 - (4) 時事新報(マイクロフィルム版)明治15-30年。
 - (5) Marat dit L'Ami du Peuple. (複刻版) Tomes 1-20. (1789-1793).
 - (6) A.S.T.M. X-ray powder diffraction Datacards. Vol. 17-20.

ただし、(1)については年度内入手可能な場合、(6)についてもブックフォームが出版された場合に購入することとされた。
2. 外国雑誌の重複購入について、利用と予算との両面からの有効な対策を検討してゆくこととなった。
3. 薬学部から薬学部教官指定図書を薬学部に備え付けてほしい旨の意見が出されたことをめぐり種々討議されたが、これらの図書を開架図書室に集中管理するのは、総合教養のために学部の垣根をこえた相互利用に供する意味を含んでいるので、これらの図書を各学部に分散するのは適当でないとの意見もあり、現状維持のまま、なお検討を続けることとされた。

第17回総会 国立大学図書館協議会開催される

標記会議は、全国々立75大学の館長、事務長等および文部省情報図書館課長、大学図書館係長の出席のもとに、さる9月30日から10月1日までの両日高野山大学(京都大学当番館)において開催された。

会議は、一般経過報告、岸本奨励賞選考委員会報告(本年度受彰者は岐阜大学附属図書館事務長・松見弘道氏「中国図書館界の調査と紹介」)、各調査研究班報告(①司書職制度調査研究班、②大学図書館建築調査研究班、③大学図書館機械化調査研究班、④参考図書の基準調査研究班)が行なわれ、いずれの報告も充実したもので、特に大学図書館機械化調査研究班報告における文部省のPPBSについては関心が持たれた。

続いて分科会は、例年のように予算と定員関係の問題に論議が集中した。

研究集会では、新しい大学図書館像について(①大学図書館の理念について、②学習機能の向上と相互協力、③機械化を中心とした大学図書館の未来像)の報告をもとに討議が行なわれた。

なお、文部省側から昭和46年度大学図書館関係重要概算要求事項についての説明があり、図書費の増額、図書館近代化設備費や図書館維持費の増額要求等、図書館に対する積極的な態度がうかがわれた。

第20回 北海道地区大学図書館協議会総会開催される

標記会議がさる10月8日に帯広畜産大学を当番館として開催された。

同会議は、当番館の上田館長の挨拶の後、同館長を議長に選び進められた。

始めに報告として、①北海道地区所在外国学術雑誌総合目録の決算報告（北海道大学）、②昭和44年、45年度第13回北海道地区大学図書館職員研究集会報告（北海学園大学）、③各館界の動向について（国、公、私立の各大学の代表から報告があり、大学改革、図書館改革等の問題にも触れられていた）、各々報告があった。

続いて協議題審議に入り、①「北海道地区所在外国学術雑誌総合目録改訂版」刊行については、同目録が刊行後10年近く経過したので改訂版の刊行を望む意見が多かったが、本学としては、学内で要望の強い「北海道大学所蔵学術雑誌総合目録・和文編（昭和44年刊行）に継続して、同・欧文編（昭和46年刊行予定）の準備中でもあり、改訂版刊行に対する余力もないので辞退したため見送られることとなった。②大学図書館の機械化については、電子計算機理解のために図書館職員に対する講習会を本学で開催してほしいとの声があったが、短期間の講習では効果も疑問であり、本学大型計算機センターの委員が各大学におられるので、各大学で講習会を行なうのが現状では最適であろうとの結論になった。③次回当番館の決定については、総会は北海道教育大学と小樽商科大学との間で協議して決定すること、研究集会は本学で開催することとなった。

四季

北大スラブ研究施設図書室

北大スラブ研究施設は、スラブ地域（ソ連・東欧諸国）の社会・文化の総合的研究を目的として、昭和28年発足し、昭和30年に官制化された。専任研究員のほか、北大や全国各地の大学から兼任研究員を迎え、文学・歴史・政治・経済・国際関係・法律の諸専門分野に分れて研究を行っており、その成果を、紀要『スラヴ研究』（年刊）に発表してきた。このように、本研究施設は、制度上法学部に附属しているとはいえ、実質的には、ソ連・東欧研究分野での共同利用的センターとして独自の発展を遂げつつあり、また諸外国研究者との交流を深める中で、わが国のかかる研究機関としての性格を、国際的にも認識されつつある。このような本研究施設にとって、文献資料の収集がもつ意味の重要さは、言うを及ばない。その独自の収集活動に加え、ロックフェラー財団、チュコスロヴァキア文化省、ポーランド大使館などから寄贈を受けた文献を加え、印刷物からマイクロフィルムにいたる多様な所蔵資料は、わが国におけるソ連・東欧研究センターとしての本施設の活動を支える物的中核となっている。

スラブ研究施設の図書室は、法学部三階の研究棟の一隅にあり、制度上は法学部の図書掛の中に一体化されているのであるが、実質的には全く別個で図書室の運営そのものが法学部図書室から独立した形で行なわれている。したがってここでは予算も別枠で配分され、図書の発注・受入・整理が全く独自になされ、法学部の施設でありながら、他の学部の図書掛と同様の観を呈している。図書は中央図書館の三層の一コーナーに別置されている。

スラブ研究施設の蔵書内容は上述の研究部門、即ち歴史・政治・経済・国際関係・文学・法律の各分野にわたり、蔵書数は昭和45年10月末日現在で洋書13,555冊、和書1,224冊、マイクロフィルム322リールに達している。蔵書数そのものは、予算の関係と設立後の年数が浅いことと相まって少ないが、内容はそれなりに厳選されている。スラブ地域の研究と一口に云っても、その範囲は非常に広く、これらの研究資料が扱う言語は、露・英・独・仏の各語は勿論、ウクライナ語、ブルガリア語、ポーランド語、チュコ語、セルボクロアチア語、スロベニ

ア語、フィンランド語、ルーマニア語等に及んでいる。スラブ諸国のそれぞれの国の百科辞典をはじめ、各国語の辞書類、各専門分野の事典、主題別の書誌等も最小限基本的なものは揃っている。特にロシア史に関するものは、全体の蔵書数の中でしめる割合も多く、17～18世紀から現代に至る基礎的な研究資料が集められている。又ロシアの場合、文学は社会的諸問題への関心を示し、思想及び政治と深いつながりを持ち、ロシアの歴史の運命に大きな役割を果たしてきたが、19世紀半ばから後半にかけての自由思想弾圧の強い時代の作家達の作品や評論も多い。これらの具体的な内容を示すものとして「欧文図書目録」Library Catalogue of the Slavic Institute, Hokkaido University 1953-1965. がある。洋雑誌は種類の上で多いとは云えないが、限られた予算の中で系統的に選択されて集められ、国内において入手不能のものはマイクロフィルムで補われている。ちなみに1971年度においては、71種類の定期刊行物が諸外国へ発注されており、このうちロシア語のものは38種類である。小冊子ではあるが、マイクロを含めた「欧文雑誌目録」The List of the Periodicals at the Slavic Institute, Hokkaido University 1953-1967. が1967年に発行されている。

マイクロフィルムは基本的な雑誌の欠号をうめているのみでなく、研究上必要でありながら国内では入手出来ない単行本を複写したものも沢山ある。「日本におけるスラブ研究」という特殊性の故に、国内で見つからない資料は、スラブ関係の蔵書を豊かに備えている外国の種々の図書館へ複写を依頼してマイクロフィルムの形で所蔵している訳である。このような状況の当然の結果として、マイクロリーダー室が独立に設けられ、フィルムの管理は云うまでもなく、利用カードも一般の図書と同様に作成されており、近くマイクロフィルムの所蔵目録が出版される予定である。

当施設においてはソビエト、東欧諸国、米国、カナダ、フランス等の図書館や研究機関とも文献の交換を行なっているが、主なものは、ソビエト科学アカデミーの図書館、シチェドリソ図書館、チュコの国立図書館、米議会図書館、ニューヨーク公共図書館、スタンフォード大学のフーヴァー研究所である。所蔵雑誌の中には、上述の図書館や研究機関から「スラブ研究」との交換として寄贈されているものも数多い。諸外国のすぐれたスラブ研究所の現状とはくらぶべくもないが、種々の資料のリプリント版の普及により質・量共に豊かな資料収集の可能性が与えられていることは何よりである。

◆ 研 修

昭和45年度大学図書館職員講習会に参加して

附属図書館	整理課・受入掛	成	田	耀	子
"	閲覧課・運用掛	伊	藤	静	子

この講習会は、最近の大学における教育と研究の進展に即応した大学図書館の基本的運営のあり方を学び、業務の遂行に必要な専門的技術の修得による職員の資質の向上を計る事を目的として開催されているもので、本年は全国3地区で行なわれ、私達の出席した東京会場では、130名の参加者により10月13日から4日間行なわれた。

講習会の概要報告と感想

〔第1日〕《大学図書館の使命 <松田智雄：東大>》

現代の情報化社会に即応し変革する大学図書館業務は、大量的文献資料を取り扱い、学術情報の急速な進歩と発達をはそくするために、もはや従来の方法では処理できぬ状態にきてお

り、機械化の問題が不可欠な要素として上げられてきている。

大学図書館における電算機の適用範囲はかなり広範で、ほとんど全業務に拡大されるが、情報の検索と速報処理に関しては電算機を置いて他に無く、その導入は、在来の図書館業務内容を全面的に変ぼうさせることになるだろう。それに伴い、高度の知識を身につけた専門職員の養成（ドクターコース）が望まれる。また、大学図書館は、大学の機能に奉仕する立場にあり、常に大学内・外機関に対し「開かれた図書館」であるべきである。

《大学図書館に望むこと <堀部政男：一橋大>》

利用者の立場から、良い本をより多く、より早く、より利用しやすくと言う事が一番望まれる。従来の保存的役割から、本来の積極的サービスに重点が置かれるべきであり、図書館間（中央図書館と部局図書室）の連絡を密にして、重複等を避け、図書予算の合理化を計るべきである。図書館職員は特に専門的主题別に精通した職員が望まれる。また文献目録作成においてもドクターディグリーを取れるような制度が望まれる。

《欧米の大学図書館における合理化・標準化の現状 <松村多美子：慶応義塾大>》

米国初め、諸外国では早くからこの問題に取り組んでおり、図書館機能の向上のためには、国力を上げ行政面・経済面での援助と協力を惜しまぬ体制がとられ、図書館行政においては、有機的なネットワーク体制がとられてきている。機械化に伴う問題で最も重用視される点は、「何を合理化すべきか」にあり、カナダのトロント大学やオランダのデルフト大学では、目録作成業務を電算機で行なっていた（オクラホマ大学の調査結果）。

また、カソリック大学・ハーバード大学・ミシガン州立大学・エール大学を初めとする米国の大学図書館では逐次刊行物等の貸し出し業務・受入・会計業務・情報検索の順で機械化がなされ（A.L.A. の調査結果）、米国議会図書館における MARC II の使用と、米国国立医学図書館の MEDLARS の現状も成果を上げている。我国の大学間でも地区的にセンター館を設ける等して、学術情報のネットワーク体制を強め、協同で目録作成に当たるべきことを強調された。

〔第2日〕《受入・整理業務の改善について <森 博：流通経済大>》

受入・整理業務は検討されるべき点が多く、早急にスタッフマニュアルを作成し、業務内容の再検討をすべきで、最終目的の「資料の利用が如何にされるべきか」を考慮すべきである。図書原簿や発注関係の諸事項を中心に、具体的説明と改善案が述べられ、国立国会図書館製作の目録カードの利用を勧められた。

〔第3日〕《レファレンス・サービスと二次資料の利用法 <井出 翀：東レ K・K>》

レファレンス・サービスを有機的に行なう上で不可欠な人・施設・情報の諸問題点にふれられ、特にレファレンス・ライブラリアンの専門性と柔軟性が説かれた。後、第二次資料の整備にあたり、選択上考慮すべき点を述べられた。

〔第4日〕《相互協力の推進とその問題点 <裏田武夫：東大>》

日本の大学図書館は、基本的図書を持つ図書館が少ないのが現状で、本来の相互貸借にはほど遠いが、相互協力体制の例として、慶応大学医学図書館のテレックス網が上げられる。外国においては、集書に特色有る国際的機関が多く、例としてナショナル・レンディング・ライブラリー、ブリティッシュ・ナショナル・ブックセンター、レーニン記念図書館、北京図書館、ソ連情報科学アカデミー図書館、などがある。これらの機関を大いに利用して、国際的ネットワークを充実させるよう努力すべきである。

パネルディスカッションでは、主に各大学の現状報告があったが、「人と予算面の不足か

ら、十分な整理・参考業務がなされていない……」との意見が多かったし、図書館職員の専門性が説かれている反面、研修や講習会が持たれている所が少ないように思えた。そんな中で、電算機導入により地区情報センターの役割をも果し、活躍しているとの慶応義塾大学図書館の報告や、教職員を対象に、機械化に関する知識を持たせ、問題意識を高めるようコンピューター講座が開かれている北大附属図書館の例、学生・院生・助手から成る図書委員会が、教官で組織されている図書委員会に活発な要望を出し活躍しているとの東京大学教養部図書室の発言が、大学改革が叫ばれ、皆が一体となって情報や図書館のあり方を真剣に考えねばならぬ今日、注目すべきものと思う。

受講者の諸条件がまちまちであったためか、講義内容が一般的傾向になりがちで、私達には、演習や見学をも行なう等、もっともっと具体的講義内容を盛って欲しかったと思う。と同時に日常業務の整理に追われ、それに固執しがちの昨今、国際的視野で MEDLARS や K・W・I・C INDEX 等の話しを聞き、図書館界の動向にふれ、図書館人としてのあり方について再考する機会を得たこの講習会を大変意義深く思う。翌年も催されるであろうこの講習会に、少しでも多くの図書館職員が参加できるよう願ってやまない。

昭和 45 年度国立学校図書専門職員採用上級（甲種、乙種）試験、 同中級試験の実施について

標記試験がさる 11 月 7 日（土）、8 日（日）の両日にわたり、附属図書館および薬学部において実施されました。受験者は上級（甲種）が 6 名、同（乙種）が 1 名、中級が 61 名で、第 1 次試験合格者の発表はきたる 12 月 22 日に人事院地方事務局にその氏名を掲示して行なわれます。

コンピューター研究会終る

附属図書館では、館報 Vol. 4 No. 5 で既報のとおり、9 月 11 日から 11 月 13 日までの毎週金曜日（午後 5 時 30 分から）に会議室で標記研究会を開催しました。今回の研究会は、主として全学の図書系職員を対象にして、昨年度の NHK コンピューター講座（フォートラン）の 16 mm フィルムを使用し、大型計算機センターの長田博泰氏の解説により、多数の参加者を得て盛大のうちに終了しました。

同氏には、昨年のコンピューター講習会に続き今回も講師をお願いしましたことを、館報の誌上を借り、ここに厚く感謝の意を表する次第であります。

◆ 人 物 往 来

新図書館委員紹介 大畑甚一助教授（教養部） 11 月 1 日付

北海道大学附属図書館報 「楡蔭」 Vol. 4 No. 6（通巻 22 号）

1970 年 11 月 30 日 発行 発行人 齊 木 一 郎

発 行 所 北海道大学附属図書館 札幌市北 8 条西 5 丁目 電話代表 711-2111 (2966)

印 刷 所 文 栄 堂 印 刷 所 札幌市北 3 条東 7 丁目 電話代表 231-5560